

# 「からだで感じるモラリティ」は教育できるのか？ —情念の教育思想史から見た習慣づけの問題—

菱刈 晃夫

## はじめに

現代日本におけるモラルの状況とか、いまの若者の道徳とかいいますと、決まって「乱れている」とか「ひどい状態だ」とかいわれます。あるいは、教育がなっていない、親や学校、それに教師は何をやっているんだなど。政治を含め、大人も子どもも含めて、ありとあらゆる場所で、今日ほどグローバルな規模でモラルが問題とされている時代はないといえるかもしれません。確かに、世の中おかしいし、乱れていると感じるときもあります。が、わたし自身も偉そうなことはいえません。

ところで、人類は人間としての自覚をもち、あえて「人間性」(humanitas)を意図的意識的に形成しようとし始めたとき、すなわち西洋教育史では古代ローマやギリシア時代から、すでに同じようなことが繰り返し語られてきました。教養や教育、つまりパイデアの誕生とともに、モラルとイン・モラル、道徳と不道徳、人間と非人間との区別、あるいは差別が生じたのです<sup>(1)</sup>。人間が他の動物と同様に、自然の一部となり、そのこと自体を意識することもなく、まさに自然な状態で生きて死ぬだけの生物であったなら、道徳も倫理も問題とはなりません。しかし、キリスト教の神話によりますと、人は禁断の木の実を口にして以来、善と悪の分裂した世界に投げ出されてしまったのです。「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」<sup>(2)</sup>。確かにこの結果、わたしたちは死を自覚する存在となり、死ぬようになってしまったのです。さらに、死を恐れるようにさえ。以後の人間の在り方・生き方をキリスト教では「罪人」といったりしますが、これは人間がどの時代や場所においても、この世で生きる限り常に分裂と不安のなかで苦しみ苛まれる生き物であることを示しています。ここに救いを求める心情としての信仰が、そして希望が生じてきます。

ともかく、もはや人間は、いついかなる場所においても、この世に生きる限り、道徳/不道徳、そして善/悪の分裂と区別、この種別や判定に悩まされ続けることになるのです。いまのわたしたち自身も、その例外ではありません。道徳教育の改革動向

について考え合うわたしたち自身の足元すら、常に不安定です。救いを求める信仰と希望に支えられた愛がなければ、「罪人」としての人間が安心して生きることなど、とうてい不可能であるといえるかもしれません。わたしたちはいったいどこに、モラルの土台、倫理の礎を築いたらよいのでしょうか。道徳教育の基礎は、はたしてどこに求められるのでしょうか。あらためて日常生活で問題とされる道徳とは何かについて、次に西洋教育思想史を簡単に省みておきましょう。道徳学の古典、とくにアリストテレスから取り上げたいと思います。

## 1. 「道徳」とは

まず道徳とは、モラル。道徳性、モラリティ。語源は、ラテン語の、mosです。要するに、慣習、風習、習俗、さらに習慣、様式、そして道徳です。人が人間として、ある共同体や社会のなかでともに生活していくために必要とされる習慣のことです。しかも、行動として常に外に現われ出ざるをえない現実態です。アリストテレス『ニコマコス倫理学』に遡れば、「倫理的徳」（エーティケー・アレテー）といういい方になります<sup>(3)</sup>。

アリストテレスは、「人間」として優れた卓越性（徳）(arete) には、2種類あるといます。卓越性や徳というギリシア語のアレテーは、ラテン語になりますと virtus、英語ですと virtue です。その2種類とは、①「知性的卓越性」「知性的徳」、②「倫理的卓越性」「倫理的徳」です。いまここで問題にする道徳とは、まず「倫理的卓越性」「倫理的徳」のほうです。アリストテレスは、こういいます。

倫理的卓越性は習慣づけに基づいて生ずる (moral or ethical virtue is the product of habit (ethos))。「習慣」「習慣づけ」(エトス) という言葉から少しく転化した倫理的 (エーティケー＝エートス的) という名称を得ている所以である<sup>(4)</sup>。

エトスは、ラテン語では habitus となります。英語だと habit です。

アリストテレスが述べることは、いついかなるころでも当てはまりそうな、極めて常識的な見解だといえるかもしれません。ある人が倫理的徳を具えているかどうか、道徳的かどうかは、その人のもつ習慣による、というわけです。人が日々どのような習慣づけを自ら心がけ、そして実際どのような習慣によって生活しているか。それを見れば、倫理的か道徳的かは一目瞭然というわけです。習慣・エトス (ethos) は、そ

の人の性格・エトス (ethos), 邦訳の仕方によっては人柄・人となりを形成するのです<sup>(6)</sup>。エトスは英語では character とも訳されます。習慣がその人のキャラクターを形作る。結論を先取りしますと, 日常生活, とくにいまは学校生活における道徳教育の根本は, 児童・生徒・学生に「善き」習慣づけをする, という一点に尽きるわけです。

ところで, 人は3つのものによって善くて有徳な者になる, とアリストテレスはいます。その3つとは, ①生まれつき (nature), ②習慣 (habit), ③理 (ことわり・理性・知性・理知) による教え (teaching) です<sup>(6)</sup>。

まず, ①の生まれつき, その人のもつ才能や素質を思い通りに変えることはできません。カエルの子はカエルです。この点で, すべての人々が平等では決してありえません。現実には教育万能主義的な幻想を抱く人々も少なからずおられますが, 人が人を意図的に変えようとする, 本質的には傲慢な試みともいえる教育, とくに近代の教育にとってさえ, その人の本性 (human nature) を変容させる上手い確実な方法など, だれももちあわせていません。教育方法についてはさまざまな意義ある試みがなされてきたし, いまもなされつつあることは認められなければなりません, 生まれつきという人間本性を前にして, まず教育は無力であることを謙虚に知る必要があると思います。が, ここから人事を超えた「わざ」(opus, Werk) が生じてくるのです。言葉にしにくい世界ですが, 教育哲学における「超越」のテーマかもしれません<sup>(7)</sup>。アリストテレスの表現によると, こうなります。

善きひとになるのは, 一部のひとびとの考えによれば本性に, 他の一部のひとびとによれば習慣づけに, また他の一部のひとびとによれば教えによる。ところで, もし本性に属するのだとすれば, 明らかにこれはわれわれのいかんともしがたいところなのであって, 何らかの神的な原因によって真の意味における「好運な」ひとびとにあたえられたものだとするほかはない<sup>(8)</sup>。

というわけで, わたしたちが人事としてなしうることは, 残すところ習慣づけと, 理知に基づき, 児童・生徒・学生の理知に訴えかける教えしかないことになります。繰り返しますが, アリストテレスが強調するのは, まず習慣・習慣づけ・エトスです。

道徳とは習慣によって形成されるのであり, その人の第二の本性としての性格を形作ります。そして, このキャラクターは, わたしたちがこの世で生きる限り, 常に行

動として外に表現されてくる状態 (hexis, characteristic, condition, active condition, disposition, etc.)<sup>(9)</sup>、もしくは性向や習癖<sup>くせ</sup>、さらに生き方なのです。

## 2. 性格形成に向けた準備

さて、習慣によって人の道徳的性格（人柄）が作られることは分かりましたが、あらためてアリストテレスがいう善き徳、望ましい道徳的性格（人となり）を具えた人とは、どのような人間のことを指すのでしょうか。いうまでもなく徳といえば通常は美徳のことを思い浮かべますが、この世にはむしろ悪徳のほうがはびこっています<sup>(10)</sup>。彼は徳を次のように定義しています。

徳とは選択にかかわる性向であり、この選択においてわれわれに対する中庸を保たせる性向のことである。われわれに対する中庸とは理知にしたがって規定された中庸、すなわち、思慮あるひとがそれにしたがってこれ〔中庸〕を規定するであろうような、そういう理知にしたがって規定された中庸である。中庸を保つとは二つの悪徳の中間を保つこと、すなわち、一方の、過剰による悪徳と、他方の、不足による悪徳の中間を保つことである<sup>(11)</sup>。

要するに、アリストテレス主義に立てば、善き道徳的性格を具えた人、すなわち善い人柄の人とは、常に理知にしたがってものごとの中庸<sup>メソテース</sup>を選択する性向を具えた人、絶えずロゴスによってものごとの中庸を選択する状態にある人のこと、を指すわけです。アリストテレスは、あくまでもここで理知の働き、それによる教え (teaching) を重視しているのです。

わたしたちが日常生活を営む上で、ここに生成してくる事象はじつに複雑怪奇かつ多様です。その都度、わたしたちはみな、自分自身はもちろんのこと、他者や共同体、さらには国家など、様々なものとの関係を考慮しながら理知を作動させて、それぞれのシチュエーションやコンディションに適したと思われる中庸を選択しなければなりません。この状況は常に変化しています。とくに現代社会は次に取り上げますようにリキッド・ライフとも呼びうる様相を呈してきています。アリストテレスやプラトンの時代においても価値相対主義と善のアイデアとの対決など、価値観をめぐるいろいろな論争が繰り返されてきましたが<sup>(12)</sup>、それはいまも同じです。その場、その時、その人に対して、はたしてどういう行動を選択することが、行き過ぎず少な過ぎ

もせず、まさしく最適かつ適切といえる中庸なのか。ここで絶えず理知を作動させ続けることの困難さ。さらには、しばしば犯す選択上の過ち。過去の人生を省みて恥ずかしさと難しさを感じることはない人は、おそらくだれもないことでしょう。何度、情念の虜となったことでしょう。再び結論を先取りしますと、日常生活、とくにいまは学校生活における道德教育の課題は、児童・生徒・学生に、理知にしたがってものごとの中庸を選択するような性向を身につけさせることとなります。性向は習慣によって形成されることはすでに確認しましたので、ここでは理知の訓練および理知に働きかけるティーチングが重要になります。

しかし、理知を何よりも重視するアリストテレスではありますが、これが的確に作動するためには、そのための準備が必要です。習慣づけという準備、さらには規則や法による強制なしに、すべての人々が理知によって生活しようといった幻想を、アリストテレスは抱いていません<sup>(13)</sup>。何ごとにおいても下準備が大事です。ましてや、他者の人柄に関わろうとする道德教育においては、とくに幼少の段階において。

理説とか教えとかも、おそらくは必ずしもあらゆるひとびとにおいて力があるわけではなく、それが有効であるためには、「うるわしき仕方において悦びや憎しみを感ずる」よう、あらかじめ聴き手の魂がもろもろの習慣づけによって工夫されてあることを要するのであって、これはいわば、種子を育むべき土壤に似ている。というのは、情念のままに生きるひとは、忠告的な言説に耳をかさないであろうし、耳をかしてもこれを理解しないであろう。こうした状態にあるひとを、いかにして説得翻意せしめることができよう。総じて、情念は理説に譲らず、その譲るのは強要に対してのみであると考えられるのである。してみれば、そこには、徳の完成に固有な倫理的性状—すなわち、うるわしきを愛し醜悪なるを厭うという—が、何らかの仕方で、すでに見出されることが必要となる<sup>(14)</sup>。

アリストテレスにおいて、確かに徳は理知による中庸を目指す選択にかかっています。それにはやはり reason の成立やこれに基づく choice を可能にする身体、すなわち「からだ」の状態が先立つのです—ちなみに、このことに注目したのがスピノザでした—<sup>(15)</sup>。このからだはわたしの生命が宿る本体であり、このからだによる多様な生命機能を指してプシケ（魂）という言葉は用いられています<sup>(16)</sup>。わたしたちの魂が、そしてからだは、将来において徳が完成するに至るように、種子を育むべ

き土壌のようにして耕されてあることの重要性を、アリストテレスは強調しています。それはまず、「うるわしき仕方において悦びや憎しみを感ずる」ように仕向ける、という感性の教育から始まります。こうも述べられます。

まことに倫理的な卓越性すなわち<sup>アレテー</sup>徳は、快樂と苦痛とにかかわるものにほかならない。事実、われわれは快樂のゆえに劣悪な行為をなしたり、苦痛のゆえにうるわしき行為を避けたりする。プラトンのように、まさに悦びを感ずべきことながらに悦びを感じ、まさに苦痛を感ずべきことながらに苦痛を感じるよう、つとに年少の頃から何らかの仕方で嚮導されてあることが必要である所以である。事実、これこそが真の教育というものであろう—<sup>(17)</sup>。

「真の教育」といわれる、しかるべき感性の教育、教導、指導。「うるわしき仕方において悦びや憎しみを感ずる」よう、わたしたちの<sup>からだ</sup>身体という土壌を、そうした習慣に幼いころから習慣づけてしまい（エトス）、これを第二の本性たる性格（エートス）にまで仕立て上げることの重要性を、アリストテレスは再三強調しています。

アリストテレスによれば道徳は、とくに大人にとっての道徳は「理知による中庸を目指す選択」の状態如何にかかっているわけですが、しかし、この理知を支える土壌としてのファンデーションはまず、からだで「うるわしき仕方において悦びや憎しみを感ずる」感性にあることを忘れてはなりません。そこで「からだで感じるモラリティ」の萌芽を育み、これをより力強いものとしながら、理知の訓練および理知に働きかけるティーチングを行っていくのです。ここに古来、リベラル・アーツと呼ばれてきたカリキュラムが成立してくるのは周知の通りです<sup>(18)</sup>。しかし、プラトンもいうように、まずは魂の状態の基礎的調律としての教育が重要です<sup>(19)</sup>。

ただし、常に難問が残ります。「しかるべき」（「正しい」）感性とは、どのようなものなのか。何が「うるわしい仕方」なのか。感性に、善いとか悪いとかいえるのか等々。こうした難問については、別に譲りましょう<sup>(20)</sup>。

### 3. 液状化する生と道徳教育のゆくえ

これまで道徳教育に関して、とくにアリストテレスのいうところに耳を傾けてきました。そこで道徳教育の本質および課題として、次の3点が確認されました。

- ① 日常生活、とくに学校生活における道徳教育の根本は、児童・生徒・学生に、「善き」習慣づけをすることにある。
- ② 日常生活、とくに学校生活における道徳教育の課題は、児童・生徒・学生に、理知にしたがってものごとの中庸を選択するような性向を身につけさせることにある。
- ③ ②は①に基づいてようやく可能になるが、その土壌には、からだが「うるわしき仕方において悦びや憎しみを感ずる」感性がある。感性教育の一環として「からだで感じるモラリティ」を育み、これをより力強いものとする努力が必要である。この実践もまた①に含まれる。

一言で、道徳教育の根本は「善き習慣づけ」にある、ということに尽きるわけです。ロックもまた、同じようなことを語っています。

人が教育によって受けとるべきもの、その人生を支配し、それに影響を与えるべきものは、早い時期に彼に加えられるものでなければなりません。それは、彼の性質の根本的なものにまでなってしまう習慣であって、うわべだけの態度、繕った体裁ではありません<sup>(21)</sup>。

また、ロックも人間が年齢等に応じて様々な欲望や願望をもつことそのものを否定はしませんが、ただ次の点を問題とします。

その願望を理性の規則と抑制に従わせないということが誤りなのです。その相違は欲望があるとかないとかいうことではなくて、その欲望のうちにあって自己を統御し、克己する力にあります<sup>(22)</sup>。

そこでロックは、子どもはまず自己の意志を他人（親）の理性に服従させることが必要だと説き、とくに父親の権威を強調します。親は子どもが小さいときにはこれに厳しく接し、大人になるつれて徐々に馴れることを許す、という日本の古来のしつけや子育てとは少し異なるような教育論が、ここでは展開されていきます<sup>(23)</sup>。ともかく、習慣の重要性は、時と場所を変えても、常に変わることはないでしょう。

どんな教訓を子供たちに与え、養育に関して非常に学識ある人の講話を、子供に説き聞かせても、子供の態度をもっとも左右するものは、子供がつきあっている仲間

であり、子供の周囲にいる人たちに現在行われている習慣であるということは、確かな真理と考えねばなりません。子供たちは、(否大人もまた)、大抵手本にならって行動します。われわれはすべて、つねに、身近にあるものの色になる一種のカメレオンです。聞くものより見るものの方が理解しやすい子供たちについては、このことは怪しむに当たりません<sup>(24)</sup>。

まさしく、ロックの仰せの通りだといえるでしょう。いくら学校で教師が、道徳の授業を張り切って行ってみたとしても、子どもを含めたわたしたちが生きるこの世の中では、いまいったいどのような習慣が横行しているでしょう。わたしたちはみなカメレオンです。しかも、注意しておかないと、だれでも知らず知らずのうちに色を変えてしまう、あるいは色に染まってしまう「罪人」なのです。ここに例外はありません。

わたしたちは、先の①と②と③の可能性を否定しませんし、またしてもいけません。とくに学校生活、さらに「道徳の時間」においては、この努力を続けていかなければなりません。が、それはわたしたちが生きる現代社会、この世の中に満ち溢れる数々の「手本」および「習慣」を前にして、どれほど有効でしょうか<sup>(25)</sup>。呆然として自信をすべて失いそうです。こういういまの世界を、社会学者バウマンは、リキッド・モダニティ—液状化する社会—と上手く捉えました。そして、ここに生きるわたしたちは液状化する生の渦の中に、否が応でも巻き込まれることとなります。現代を特徴づけるキーワードのひとつとして、消費主義 consumerism があげられます。

ちなみに、このグローバル化する世の中は、同じく社会学者ギデンズの書名からしますと、一種の「暴走する世界」(runaway world)でもあって、だれもがもしかしたらどこかおかしいと思いつつも、もうだれにも止められない状況、終末論的破局に突き進んでいるのかもしれません。

バウマンもギデンズも希望を捨ててはいませんが、バウマンは、それでもとくに教育に期待をしています<sup>(26)</sup>。先の③は、決して途絶えることはないのであって、教育の成果、必ずや②のような人類の理知が作動するであろう、という希望であり信仰です。結局、教育の原動力には、希望と信仰が、そしてこの二つを起源として他者に働きかけようとする愛が、必要なのかもしれません。ともかく、消費主義にどっぷりと漬かる現代とは、どのような社会なのでしょう。

先にロックは、欲望そのものが悪ではなく、これを理性の規則と抑制に従わせるこ

とが重要だと指摘していました。欲望のなかにあってもセルフ・コントロールできる克己心とでもいえるでしょうか。しかし、いまのわたしたちを取り巻く「習慣」は、抑制とか克己とかを、美德ではなく、悪徳としています。何ごとでもできるだけがまんをせず、いまここで欲望を満たすことの推奨。それによる儲け。経済の発展と成長。それほど発展や成長が、大事なのでしょう。必要なのでしょうか。生物として生きていくための wants や needs は限られたものですが、人間の desire には限りがありません。欲望が満たされることは決してありませんし、消費主義によって回転する現代社会においては、また欲望は満たされては困るどころか、ますます欲望を肥大させていかなければならないのです。

リキッド・ライフは消費する生活である。それは世界のあらゆる部分を消費の対象、すなわち、使われていく過程で、その有用性（つや、魅力、誘惑する力、価値）を失っていく対象であるとみなす。世界のありとあらゆる部分は、消費の対象をひな形として判断・評価される<sup>(27)</sup>。

このなかに、わたしたち一人ひとりの人生も引きずり込まれてしまいます。役立つか否か、有用かどうかといった物差しで、すべてが測られる世の中。常に更新され続けなければならない業績書。不安定、不確実性、危険性、リスクに苛まれ続ける人生です。それは、つまるところ欲望に支配されるからです。

消費社会に独自性があるとするれば、それはその社会が人間の欲望を、かつてどの社会もできなかった、夢見ることすらできなかった形で、満たすと約束することにある。しかし、その約束に魅力があるのは、欲望が満たされない限りであり、より正確に言えば、「実はまだ欲望を十分満たしていないのではないか？」という疑念があるときだけである。…消費者をターゲットにした経済の車輪に弾みをつけているのは、欲望が満たされないことであり、どんなに欲望を満たしても、欲しいものはまだまだあり、もっと深い満足も得られるはずだという果てしない確信である<sup>(28)</sup>。

いうまでもなく教育もまた、こうした親や子どもといった消費者を相手にしたサービス業と化しつつあります。しかも、「関心」「意欲」「態度」など主体性の尊重といっ

て、何を消費するのか訳も分からない—情念のなすがままの一子どもの欲望や願望を「尊重」した結果、何も学ばなくてよいという主体性や、何でも好き勝手なことをしてよいという主体性や、要するに自己中心性を野放しにしてしまったのかもしれませんが。が、これは教育界もまた消費主義の渦の中に否応なく呑み込まれた結果といえるでしょう。世の中の仕組みに多少なりとも関心のある親ならば、それに見合った学校に、それ相応のサービスと価値を付与してくれる学校に、欲望を満たしてくれるかのように思われるところへ、場合によっては親や子どもの「生まれつき」を柵に上げて、競い子どもを遣ることでしょう。いずれにせよ消費主義は、「社会統合やシステムの再生産から人格形成や生活目標の設定までを統括する力として作用する」<sup>(29)</sup> のです。その本質は、「ペテン・過剰・浪費の経済」<sup>(30)</sup> ですが、いまの日本に生活していて、この例外でいられる人はほとんどいないでしょう。

しかし、こうした世の中を実現可能にしたのは、それまでの「勤勉」があったからでした。あるいは「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」が。「楽しみは後回しにする delay of satisfaction」。そして、「じっくり取り組むことはりっぱなことである」<sup>(31)</sup>。こうした価値観によって、これまでの近代社会は築き上げられてきたのかもしれませんが。これと近代社会の成立に寄与した学校の規律・訓練といったエトスもぴったりフィットしました。ここで勤勉や努力や克己といった徳目を説くにも、社会のエトスとも符合して、不協和音を奏でるのも少なかったことでしょう。

ところが、いまでは状況が全く違ってきています。いま・ここで欲望を現時充足的に満たすことを推奨する世の中。そこにどっぷりと漬かる子どもを含めたわたしたち。モノを大切にしましょうといいながら、同時に使えるモノも使えなくしてエコだのリサイクルだのという社会。じっくり取り組んだいたら、知らないあいだにすでに役立つとされて、時代遅れで廃棄されてしまう社会。

「リキッド・モダン」社会とは、そこに生きる人々の行為が、一定の習慣やルーティーンへと〔あたかも流体が個体へと〕凝固するより先に、その行為の条件の方が変わってしまうような社会のことである<sup>(32)</sup>。

はたして、このようなりキッド・モダンのなかで、とくに学校教育において①を根本とする道徳教育は、どこに足場を見出したらよいのでしょうか。わたしたちを取り巻く「習慣」が液状化しているのなら、こういう時代に、いったいどのようなエトスが「善

き」習慣なのでしょうか。また、どのようなエートスのもち主が「善い」人柄といえるのでしょうか。道徳教育のゆくえは、どうなるのでしょうか。

### おわりに—それでも教育に希望を託して—

消費主義に浸食されて、学校の規律や規範も、近頃ではずいぶんゆるいものとなっています。しかも、ゆとり教育に学校のスリム化。地域や学校の影響力は弱まり、いわゆる「しつけ」は家庭の責任とされます。他人<sup>ひと</sup>の家の子ども<sup>こ</sup>のことをとやかかいうな、という声も聞こえてきそうです。問題は、①②③にほどほど関心のある、責任感ある親ならまだしも、それを担いきれない、あるいは元々担う能力のない親に「しつけ」の責任が課せられた場合でしょう<sup>(33)</sup>。

たとえば、教育実習校を訪問しまして、これも学校によって、またはクラスによって、全く異なるのですが、たとえば「善き」習慣のひとつと思われる正しい（もしかしてわたしだけが善くて正しいと思っているだけかもしれませんが）箸の持ち方など、ほとんど見かけたことはありません。食べ物をつまむにも、口に運ぶにも、じつに大変そうで、ぼろぼろこぼすわけですが、それを指導する教師がいないのです。これは、家庭でのしつけなのでしょう。その通りだと思います。が、親がそもそもそういう食べ方をしているのかもしれませんが。なんせわたしたちはカメレオンですから。校長先生はどんどんいってくださいといわれるのですが、たまたまお客さんでいるわたしが一言いってどうなるわけでもありません。が、ここでいうことも大切なかもしれません。ちなみに、鉛筆の持ち方も同様です。骨の折れる仕事ですし、親から文句をいわれたり大変かもしれませんが、しかし、大体こういうところに道徳教育の根っこがあるのではないのでしょうか。このイロハのイを疎かにして、道徳の授業など考えられません。やはり、せめて義務教育の学校では、教師が指導してしかるべきではないのでしょうか。地道で根気のいる仕事ですが、とても大切な仕事です。

他にも、椅子に座る姿勢、本を読むときの姿勢、ノートの取り方など、学校生活のなかで「善き」習慣を身につけさせる機会は、いくらでもあります。要するに、これらはすべて学習に向かう「構え」の問題にもつながります。学びに向かうには、それにふさわしい構えや態度があるのであって、この習慣があつてこそ、他の学びもようやく成立するといえるでしょう<sup>(34)</sup>。他の学びには、むしろ道徳の授業も含まれます。

じきにこの子たちは、身体だけは大きくなって、電車の中で、あるいは教室で、わ

たしたちの前で大きな子どもとしての態度を、何ら悪びれる感覚もないまま曝け出すことになるのかもしれませんが、彼らに責任はありません。それを咎めることもせず見過ごした大人の責任です。

とはいうものの、何かしら事があると暴動やデモが起こるような国とは異なり、よい悪いは別にして、わたしたちは何と「大人しい」ことでしょう。青少年が凶悪化しているという報道や、若者のモラルが低下しているという感じも、鵜呑みにしてはなりません。ちなみに、わたしはスポーツクラブにほぼ毎日通っていますが、お行儀が悪いのは、むしろ年配の方々であることにもときどき驚かされます。世代にかかわらず、善い人柄の人も、悪い人柄の人も、同じような割合でいるのではないのでしょうか。これと道徳教育とは、あまり関係がないようにも思えてきます。

まとめます。液状化する現代社会において道徳教育のゆくえは前途多難ではありますが、些細なことの積み重ねとしての「善き」習慣づけは、いまでもこれからも常に可能だという信念<sup>ピリフ</sup>をもって、わたしたちは教育に取り組まなければなりません。道徳教育は、学校教育の全体を通じてなされるのです。このなかで「からだで感じるモラリティ」を、理知の土台としての感性を育む努力をしなければなりません。「うるわしき仕方において悦びや憎しみを感ずる」感性は、国語、算数、理科、音楽、図工など、すべての教科を通じて育むことが可能です。が、そのための準備として「学びに向かうエトス」としての習慣づけが欠かせません。忍耐強く作文を書き上げるとか、算数の問題に取り組むとか、実験を成功させるとか、ある楽曲が弾けるようになるまで練習するとか、一枚の絵を完成させるとか、そういった「構え」の習慣づけです。

道徳教育の改革動向にしては、じつにありきたりな結論となり、何も提言していないことになってしまいそうですが、やはり教育改革とか変革とかスローガンのように唱える前に、まだまだ地道にふだんの学校生活のなかで「やるべきこと」「やれること」「やらなければならないこと」は、たくさんあるのではないかという思いがいつもしています。「からだで感じるモラリティ」を教育しようと試みることは可能ですし、またしなければならないのです<sup>(35)</sup>。また、情念を上手く誘導することも可能なのです<sup>(36)</sup>。この世で、絶対に確かだといえるものはありません。が、わたしたちもアリストテレスと同様、絶えず「ロゴスによってものごとの中庸を選択する状態にある人」たるを目指して、時と場合、相手に応じて教育を行い続けなければなりません。「ものごと」は、いつもリキッドなのです。だから、そのたびに中庸が求められるのです。しかし、こ

れは翻って、他ならぬ自分自身にとっての道徳教育ともなるでしょう。教えることによって学び、また学ぶことによって教える。教育とは、こうした絶えざる往還運動です。あとは、人事を尽くして天命を待つしかありません。ただし、「知って行わざれば知らずに同じ」<sup>(37)</sup>。やや絶望的になることもしばしばですが、わたし自身も、大きな子どもあふれる教室のなかで、しなやかに努力していきたいと思います。いま、ここから始める道徳教育に希望を託して。

#### 注

- (1) 詳しくは、宮野安治・山崎洋子・菱刈晃夫『講義 教育原論—人間・歴史・道徳—』成文堂、2011年、167頁以下第III部、参照。
- (2) 『創世記』第2章17節。
- (3) 東洋の道徳に関しては、拙著『からだで感じるモラルティ—情念の教育思想史—』成文堂、2011年、249頁以下、参照。
- (4) アリストテレス『ニコマコス倫理学(上)』高田三郎訳、岩波文庫、2009年、69頁。*The Loeb Classical Library, Aristotle XIX, Harvard University Press, 1934, p.71.*
- (5) 『アリストテレス全集13』岩波書店、1973年、39頁、377-378頁訳注(1)、参照。
- (6) アリストテレス『政治学』山本光雄訳、岩波文庫、1961年、342頁。Cf. *Aristotle's Nicomachean Ethics: A New Translation by Robert C. Bartlett and Susan D. Collins, The University of Chicago Press, 2011, p.230.*
- (7) ルターの教育思想には、人事を尽くして天命を待ち、そこに「神のわざ」を見出す超越の視点が多数含まれています。詳しくは、拙著『ルターとメラニヒトンの教育思想研究序説』溪水社、2001年、拙著『近代教育思想の源流—スピリチュアリティと教育—』成文堂、2005年、参照。
- (8) 前掲『ニコマコス倫理学(上)』、237-238頁。
- (9) *Ibid.*, p.306. ヘクシスというギリシア語のニュアンスを一言で翻訳するのは困難です。
- (10) 前掲『からだで感じるモラルティ』、参照。
- (11) 前掲『アリストテレス全集13』、53頁。訳を一部変更しました。
- (12) 前掲『からだで感じるモラルティ』、参照。
- (13) アリストテレス『ニコマコス倫理学(下)』高田三郎訳、岩波文庫、2009年、239-240頁。
- (14) 前掲『ニコマコス倫理学(上)』、238頁。
- (15) 前掲『からだで感じるモラルティ』、参照。
- (16) G.E.R. ロイド『アリストテレス—その思想の成長と構造—』川田殖訳、みすず書房、1998年、154頁、参照。
- (17) 前掲『ニコマコス倫理学(上)』、77頁。

- (18) 前掲『講義 教育原論』, 192 頁以下, 参照。
- (19) 前掲『近代教育思想の源流』, 21 頁以下, 参照。
- (20) 前掲『からだで感じるモラリティ』, 参照。
- (21) J. ロック『教育に関する考察』服部知文訳, 岩波文庫, 1967 年, 59 頁。
- (22) 同前書, 50 頁。
- (23) 同前書, 57 頁。日本人のしつけの歴史の変遷や捉え方については, 広田照幸『日本人のしつけは衰退したか—「教育する家族」のゆくえ—』講談社現代新書, 1999 年, 参照。あわせて, 前掲『講義 教育原論』, 205 頁以下, 参照。
- (24) 前掲『教育に関する考察』, 87 頁。
- (25) 消費主義もしくは消費社会と学校教育の規範は, 根本的に矛盾します。藤田英典・田中孝彦・寺崎弘昭『教育学入門』岩波書店, 1997 年, 31 頁以下, 参照。
- (26) Z. バウマン『リキッド・ライフ—現代における生の諸相—』長谷川敬介訳, 大月書店, 2008 年, 25 頁以下, 参照。
- (27) 同前書, 20 頁。
- (28) 同前書, 139 頁。
- (29) 同前書, 141 頁, 143 頁の訳注。
- (30) 同前書, 141 頁。
- (31) 同前書, 144 頁。
- (32) 同前書, 7 頁。
- (33) 前掲『日本人のしつけは衰退したか』, 198 頁以下, 参照。
- (34) 「学び」をめぐる習慣の問題については, 辻本雅史『「学び」の復権—模倣と習熟—』角川書店, 1999 年, がよい参考となります。習慣と教育に関する問題については, 今後の課題とします。
- (35) 日本版の品格教育(Character Education)も興味深い試みといえるでしょう。青木多寿子編『もう一つの教育—よい行為の習慣をつくる品格教育の提案—』ナカニシヤ出版, 2011 年, 参照。関連して, 野口芳宏『野口流 教室で教える小学生の作法』学陽書房, 2008 年, などもよい参考になります。
- (36) ちなみに, デカルトは『情念論』(*Les Passions de L'ame*, 1649) の末尾を, こうしめくくっています。「情念に最も動かされる人間は, 人生において最もよく心地よさを味わうことができる。たしかに, かれらは, 情念をよく用いることを心得ておらず, 偶然的運にも恵まれない場合には, 人生においてまた最大の辛さを見いだすかもしれない。けれども, 知恵の主要な有用性は, 次のことにある。すなわち, みずから情念の主人となして, 情念を巧みに操縦することを教え, かくして, 情念の引き起こす悪を十分堪えやすいものにし, さらに, それらすべてから喜びを引き出すようにするのである」(『情念論』谷川多佳子訳, 岩波文庫, 2008 年, 181 頁)。デカルトにとっても, 情念はその本性上すべて善でなのです (261 頁以下参照)。

(37) これは貝原益軒『慎思録』のなかの言葉ですが、ちなみにペトラルカは、これまでわたしたちが導きの糸としてきたアリストテレスについて、こんな批判をしています。「わたしの見るところ、アリストテレスはたしかに、徳をみごとに定義し、分類し、するどく論じ、さらに悪徳や美德のあらゆる特質についても論じています。それらを学び知ったとき、わたしの知識は以前よりすこしばかり増えます。しかし魂は以前のまま、意志もものままで、わたし自身は変わりません。知ることと愛することは別であり、理解することと意志することは別なのです。かれはたしかに、徳とはなにかを教えてください。しかし徳を愛し悪徳をにくむよう、ひとの心をかりたてたり燃えさせたせたりする、ことばの力や炎が、かれの論述には欠けています。あるいは、ごくわずかしかそなわっていません」(『無知について』近藤恒一訳、岩波文庫、2010年、113頁)。こと道徳や倫理に関しては、理屈をこねることもさることながら、むしろ大切なのは、自らをも実践へと駆り立てる愛や意志、そして情念に尽きるのかもしれませんが。「徳性を養うには自力で、或る程度まで進むことが出来る」(『新渡戸稲造論集』鈴木範久編、岩波文庫、2007年、13頁)という新渡戸の信の世界に近いのかもしれませんが。愛や意志や信仰を抜きにしては、やはり自他ともに教育は語れないし、また成り立たないのかもしれませんが。日々修行です。

付記：拙論は、日本教育学会第70回大会、テーマ型研究発表「道徳教育の改革動向」、2011年8月26日、千葉大学にて、矢野智司・京都大学、越智康詞・信州大学、押谷由夫・昭和女子大学と共同発表した際の原稿に、修正を施したものである。